

令和7年度 地域循環共生圏づくり支援体制構築事業 実施計画書（継続団体用）

活動団体の本事業での活動テーマ

『「かさまSDG s プラットフォーム」の再起動』

活動団体の活動地域：茨城県笠間市

活動団体名：特定非営利活動法人友部コモンズ

中間支援主体名：認定特定非営利活動法人セカンド
リーグ茨城

参加団体の基本情報

(1) 活動団体の基本情報

団体名	特定非営利活動法人友部コモンズ
活動地域	茨城県笠間市
専門性・強み	
# 市民自治 # 市民参加 # 有機農業普及推進 # 環境再生型有機農業 # 森林再生活動 # コミュニティ農園 # ざっだんコーヒー	

団体概要
この法人は環境課題と、「生きづらさ」などの社会課題の両方に取り組むべく令和3年に立ち上げた任意団体（令和5年NPO法人化）である。ミッションは“人間だけでなく、動物や昆虫、植物、微生物など、あらゆる生き物が居場所を持ち、調和して暮らせる地域をつくること”
“持続可能な地域をつくる＝地域内でできるだけ自給し、資源を循環させる”ことを目指し、市民主体で活動を推進する過程で、関わる一人一人が自分らしさを見つけ、発揮できるコミュニティを作る事で、環境課題と社会課題の統合的な解決を目指す。

(2) 中間支援主体の基本情報

団体名	認定特定非営利活動法人セカンドリーグ茨城
活動地域	茨城県全域
専門性・強み	
# 中間支援 # 子育て支援 # 市民活動支援 # ESD活動支援推進拠点 # 多様なネットワークづくり	

団体概要
活動エリア：茨城県全域 地域の課題解決に意欲的に取り組む市民や団体に対して、情報の提供、運営の相談、相互の交流、協働の促進などの事業を行うことで、多様な担い手により地域活動の活性化を促進させる。そのことによって、弱体化しつつある基礎コミュニティの再生と、地域社会と行政との協働の機会や、その手法の拡充を推し進め、「協働型社会」の実現に寄与し、また、子育て家庭を軸に地域に住む人々が共に支え合い、情報交換や学び合う場の運営などを通し、子どもが自分らしく成長でき、子育て世代の養育者が安心して活躍できる環境を地域の中に生み出していく

活動団体と地域の紹介



写真：笠間市ホームページ、笠間市観光協会より

茨城県笠間市

人口 : 72,573人 (R2年10月時点)

面積 : 約240km²

主な産業 : 農業、観光

温暖な気候で多様な農作物が栽培可能。観光資源として栗、笠間稻荷神社や合気神社、笠間焼があるが、人口減少と高齢化が進行している。

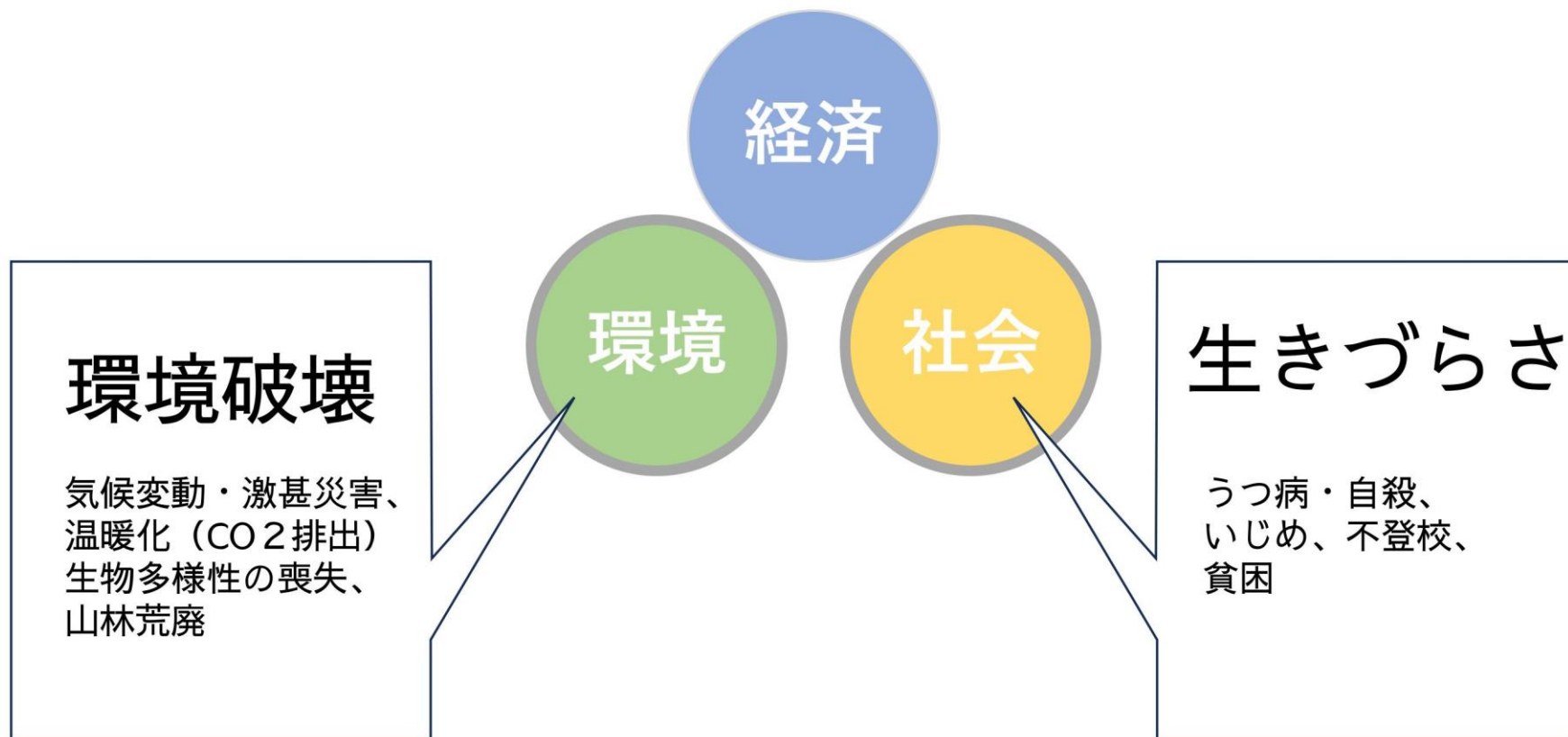
友部コモンズ 団体概要



友部
コモンズ

団体名	特定非営利活動法人友部コモンズ
設立	2021年3月（2023年3月NPO法人化）
拠点	茨城県笠間市鯉淵
代表	山神智子、廣水乃生
正会員数	11名（2023年1月時点）

友部コモンズが取り組む社会課題



経済・環境・社会のバランスが崩れている

あらゆるものの商品化

- ・ 商業利用による山林や緑地の減少
- ・ 大量生産による資源の過剰利用
- ・ 長距離輸送によるエネルギー消費
- ・ 消費の裏にある環境破壊が見えない社会構造が環境破壊を加速させる

経済

- ・ お金への過度の依存が企業雇用への人口の集中を生む
- ・ 「求められる人材像」の画一化
- ・ 学校や会社に適応する過程での主体性の喪失、自己肯定感の喪失

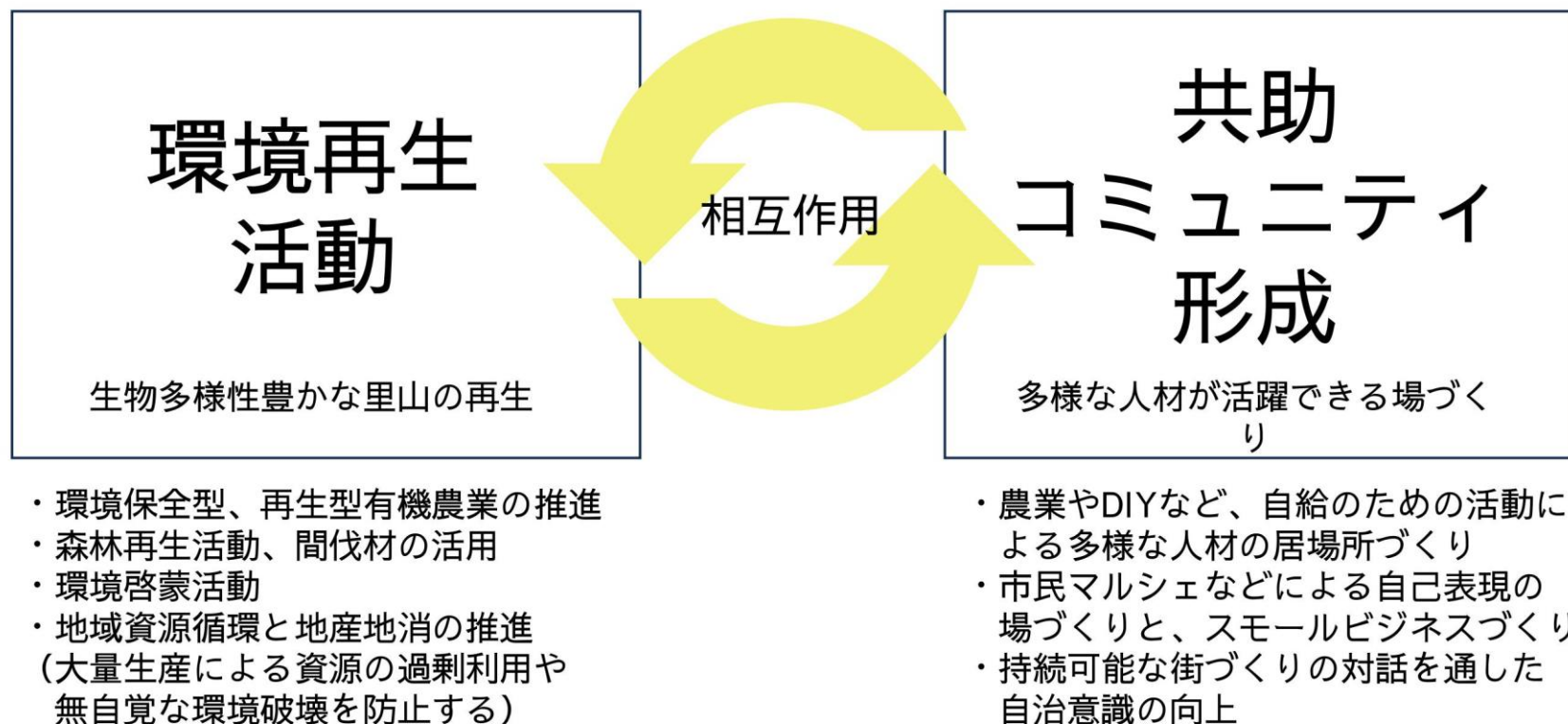
環境

社会

環境破壊

生きづら
さ

課題解決のための友部コモンズの活動



活動団体の目指す地域の姿

■ 地域循環共生圏の構築を通じてありたい地域の姿

自分たちの暮らす地域の在りたい姿を主体的に考え行動する多様な立場の人たちが集う場を通して一見立場の違う人たちが持続可能な地域づくりに向けた共通点を見出し、共創の連鎖が生まれやすい地域となっている

■ 地域に必要なプラットフォームの体制や仕組み

様々な立場や考えを持つ地域の人たちが、対話を通して想いを共有し、共創、事業創出ができる仕組みを確立する

■ ローカルSDGs事業として取り組む内容

- ・ マンダラワークショップの参加者から出た課題の学習会（講演・視察など）
- ・ マンダラWSを通した「かさまSDGsプラットフォーム」の仕組み構築（スキーム化）

■ 地域の現状と課題

人口：70,470人（令和7年4月時点）

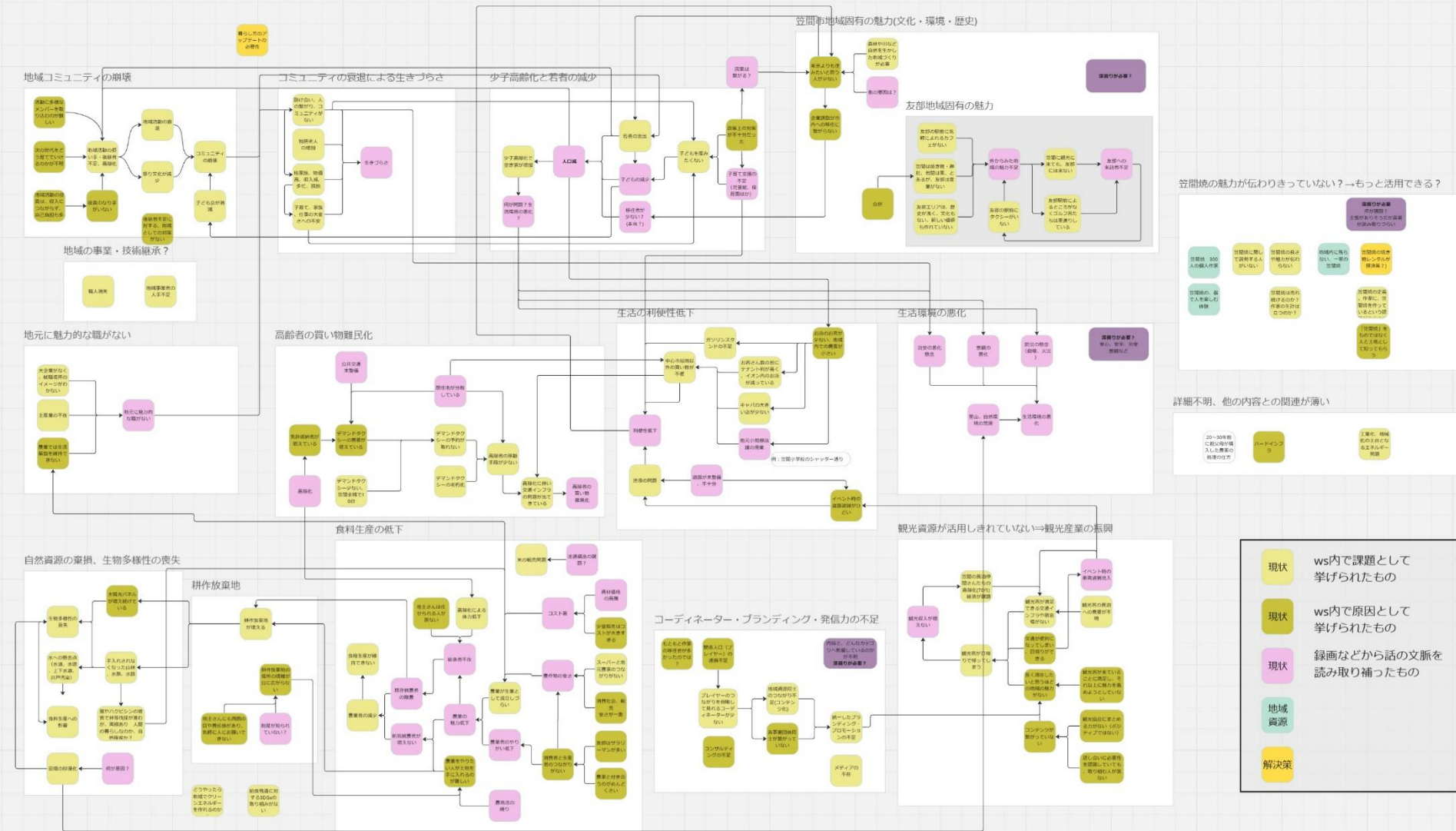
1次産業：稲作を中心に栗等の果樹や小菊をはじめとする花き、野菜など様々な農作物が栽培できる環境にある。

栗は、栽培面積・栽培経営体数が全国の市町村の中で1位を誇る

高齢化（高齢化率33.2令和5年時点）と地域や農業の担い手不足

耕作放棄地の増加

現時点のマンダラ

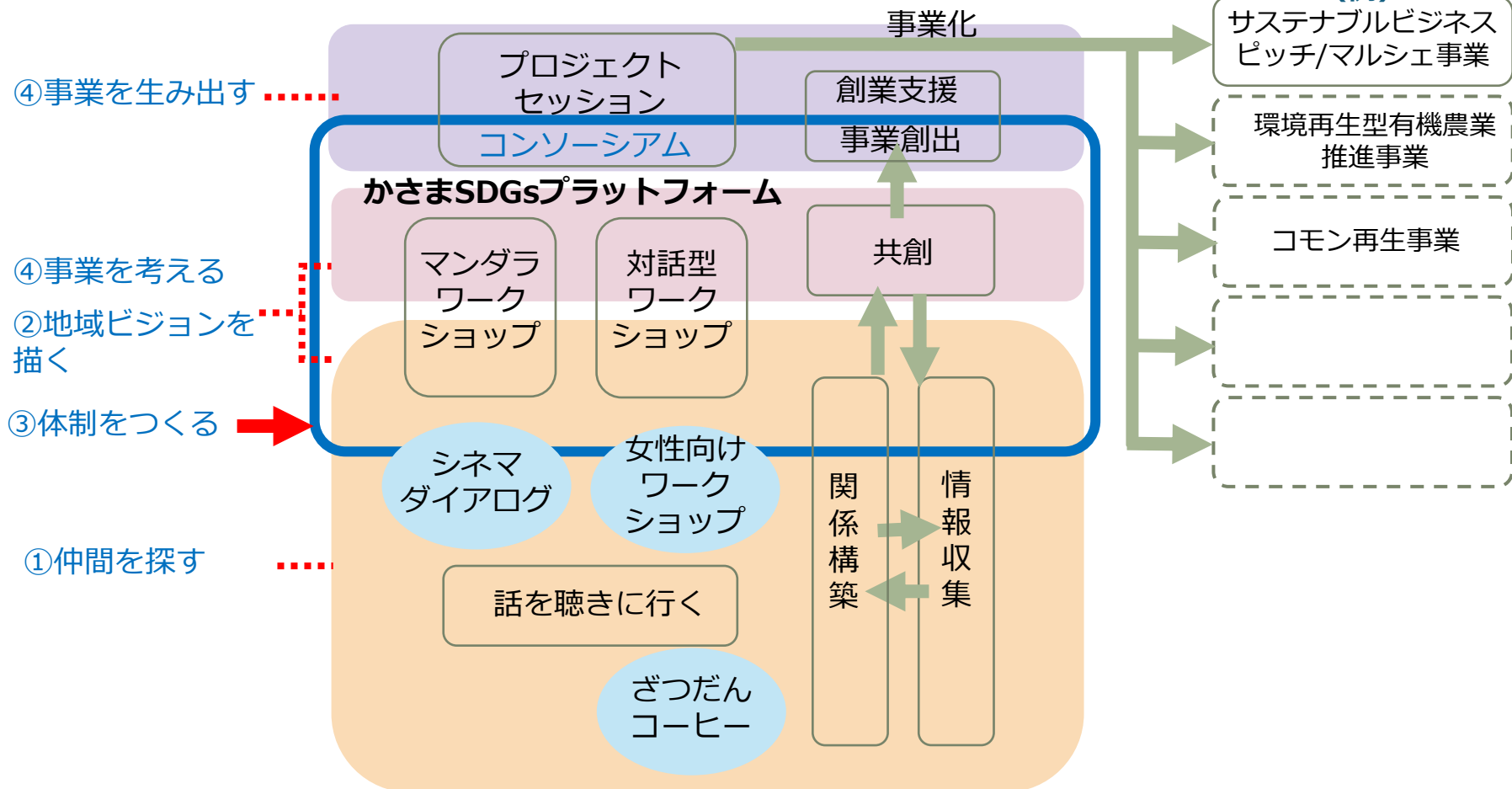


“地域プラットフォーム”のイメージ

アクションサイクル

地域プラットフォーム

ローカルSDGs事業 (例)



ローカルSDGs 事業の詳細

事業名称：耕作放棄地を含む里山再生事業		
あらすじ		
2024年11月19日に笠間市役所で実施した「ざつだんコーヒースタンド」にて「あなたにとって笠間市は何点？」という質問でコーヒースタンドに来た方々にヒアリングを行った。そのとき、有機農家の方が、「工業団地ができて一気に雑木林や雑草が壊されてしまうが、周辺の里山とバランスしながら自然やコミュニティも維持しながらの開発が大切である」という声があった。		
ストーリー		
・上記発言のあった農家の方と後日お話ししたところ、笠間市内にある耕作放棄田んぼエリアに太陽光発電開発会社から売ってほしいと地域の地主さんに話に来ている流れがあり、放棄地のままだと売られてしまうとのことで、お米作りに関心を寄せていた企業に勤めている方々と農家さんと組んで、2024年12月15日から耕作放棄地の開墾を始める。耕作放棄地が次々と開発されていく流れに対して、食料生産を普段担わない層を取り込んでいく事業を構想できないかを実施メンバーと探索しているところである。		
・笠間市の市有林にて森林再生に取り組む中、2024年12月29日に近隣の方との立ち話からかつてその集落での蛍の存在や里山風景について伺い、その方が所有する田んぼが30年近く放棄されている話を伺った。そこで森の活動と並行して、その方の田んぼを再生しながら里山の風景を取り戻す試みが起こってきた。高齢化と過疎化によって空洞化し耕作放棄地が増えていく流れに対して、稲の多年草化による負担軽減を視野に入れた耕作放棄地の再生と生物多様性の回復を目的とした「里山再生」事業の姿を実施メンバーと探索しているところである。		
事業の骨子		現時点で想定される課題・ボトルネック
①ありたい未来	工業化と周辺の里山の自然環境やコミュニティのバランス	・ビジネスモデルがまだ明確でない ・資金の流れ ・人をどう集めるか ・技術も試行錯誤 ・高齢化による技術承継の時間 ・地域住民の参加・参画の啓蒙 ・消費者の生活スタイル
②課題	自然環境が開発で壊されている 高齢化と過疎化 耕作放棄地	
③なぜこの事業をやるのか（Why）	事業で自然環境破壊・高齢化と過疎化によるコミュニティ崩壊・耕作放棄地を解決し、地域地域の実情に応じた里山再生の姿を明らかにするため。	
④地域資源	耕作放棄地と地主 有機農業者 食料生産に関心のある消費者	
⑤商品・サービスの具体的な内容（What）	耕作放棄地の地主には、豊かな田んぼと管理のサポート 農業者には、食料生産のマニパワー 食料生産に関心のある消費者には、生産に関わる機会 地域の方々には、生物多様性豊かな、整った自然環境	
⑥担い手（Who）	農業者 食料生産に関心のある消費者	課題・ボトルネックを乗り越えるために力を借りたい人物・企業像
⑦事業で生じる循環	ヒト：上記参照 モノ：お米 カネ：（検討中） コト：生物多様性・水・土	・農機具メーカー ・資材や道具を提供しているスポンサー企業 ・食料生産や里山再生の研修を求める企業 ・技術や知見をもっている専門家 ・地域住民
⑧事業で生じる成果	人が集まるエリアになる場合、自然と調和した里山で食料生産を伴い暮らしの場が再生していく。一方で人が離れていくエリアになった場合は、稲の多年草化や森林再生を通して自然に戻っていく里山風景を取り戻していく。	

3カ年状態目標

■2026年度末の状態目標

- ・「かさまSDGsプラットフォーム」参加者の中から自分たちで課題解決に取り組もうとする人たちが増え、ローカルSDGs事業が1つ生まれ、スタートアップ状態にある

■2025年度末の状態目標

- ・マンダラづくりワークショップを段階的に開催し、多様な立場の人たちで作り上げた笠間版マンダラの精度が上がっている。
- ・マンダラづくりワークショップを通じ、「かさまSDGsプラットフォーム」のスキーム化が進んでいる。
- ・マンダラづくりワークショップを通じ、地域の環境や社会課題に関心のある人たちが地域づくりに関心をもって動くようになっている。参加者どうしで共創の気運が高まっている。

■2024年度末の状態目標と振り返り

- ・シネマダイアログを月に1回の頻度で開催し、世界の課題から地域の課題を認識したり、参加者同士の新たな関係性を築くことができた。
- ・専業主婦や子育て世代の女性に向けたワークショップを行った。講座の内容が生涯学習的要素に傾いてしまったことは課題ではあったが、参加者どうしの繋がりづくりはでき、プラットフォームへの参加に繋げることはできた。
- ・年度後半から実施体制を見直すとともに関東EPOの支援を受けながら、地域の現状や課題を多様な立場の人たちと対話するマンダラワークショップ体験会を開催し、2025年度の「かさまSDGsプラットフォーム」再始動に向けた足がかりを作った。

中間支援主体のありたい姿

■ 中間支援主体としての獲得目標

- 支援団体の主体性とミッションを大切にしながら、実際に行う事業活動を具体的に支援できる中間支援団体を目指す。
- 中間支援主体としてさらに獲得したい中間支援機能は、専門家集団や別の事業などを行っていて中間支援ができる団体とのネットワークをつくり、支援する仕組みを構築する。

■ 中間支援主体としての本事業終了後の地域づくりへの貢献

セカンドリーグ茨城が目指す「協働型・共助型社会」の実現のために地域循環共生圏を目指す地域プラットフォームの概念を取り入れる。

人間が健康で健全な暮らしを継続して行くためには、健康で健全な自然環境は欠かせない。それを持続可能なものにする視点や価値観が経済活動や暮らしに必須と考える。

友部コモンズが目指すプラットフォーム中に子ども子育ての領域を加え、地域の学校や教育機関もステークホルダーに加え、地域循環共生圏の未来がつながるプラットフォームをモデルとし、県内に地域循環共生圏づくりを広げ、各共生圏がネットワーク化することを目指す。そのために3ヵ年通じて知識やノウハウを共有し、スキーム化に取り組み、中間支援主体として協働して推進していく人材や団体を茨城県内に拡げることを目指す。

中間支援主体の支援・取組計画

■ 中間支援主体の1年間の支援目標

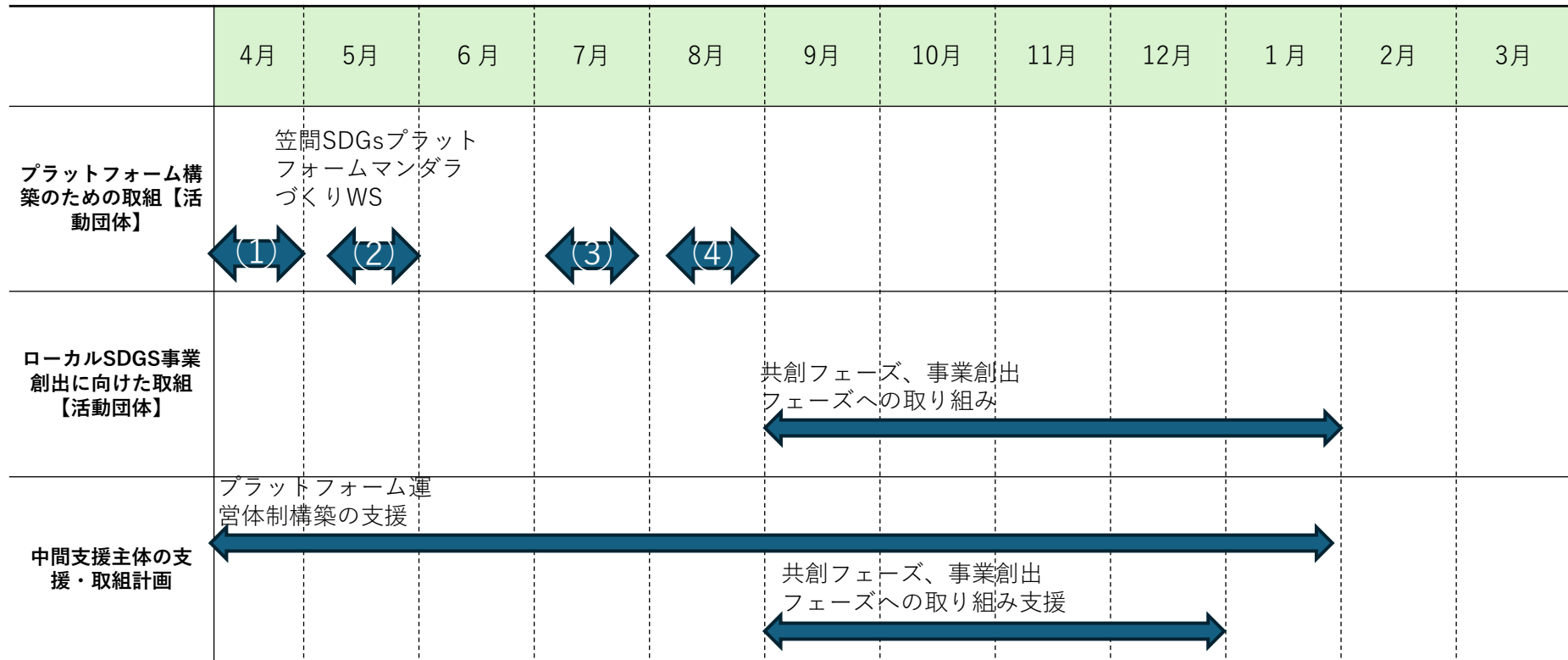
かさまSDGsプラットフォームマンダラづくりWSを通じて、笠間市の現状を俯瞰できる資料を作成し笠間の現状を共有するとともに、様々な視点を持つ参加者同士を繋げ活動や事業を共創する下地づくりをする。

■ 支援計画

	活動団体の取組における現状と課題 (見立て)	課題を解決するために必要と考える手段 (打ち手)
①	「かさまSDGsプラットフォーム」を通じた対話・議論を通じて、参加者内での共有知や暗黙の合意が生まれ始めているが、より広く多様な主体を巻き込んでいくためのビジョンの可視化・整理が課題になっている。また、ワークショップの内容が構造的に整理されておらず中長期的に対話・議論の場を継続するには、一定程度の構造化・形式化が必要。	・マンダラづくりWSの基本的考え方や手法を関東EPOから学び、そこから得られた成果を基にWS参加者ともに対話を重ね、マンダラの階層を重ねていく ・WS参加者が課題や魅力として挙げた「もの」や「こと」を皆で見学するなどつながれる機会や場をつくり参加者どうしから共創が生まれるきっかけをつくる

活動・支援スケジュール

■スケジュール



備考（補足説明など必要な場合は記載）

4月から8月にかけて開催するマンダラづくりWSにて、地域を俯瞰して見れるマンダラを作成することに加え、適切な働きかけによって、共創・事業創出フェーズに参加してくれる方を探し、増やしていく。8月9月以降は、WS参加者から出た課題の学習会を行うなど、参加者が中心となり、かつ他の参加者との共創も期待できる取り組みを行い、WS参加者と共に事業の種を探していく。